

「青藍会」の誕生

柳澤 昭

昨年六月十二日、まだ都心が眠りからさめない早朝、時ならぬ家内の悲鳴にも似た声で目がさめたと同時に、飛び込んできたテレビの画面は大平総理の急逝を伝えていた。衝撃とも何ともいいようのない感情で、しばらくは石のように凝然としてしまったことであつた。

かえりみて昭和四十一年は、青年会議所の仲間たちが、ついに政治研究にその足を踏み出した記憶さるべき年である。時の会頭辻兵吉氏のもとで副会頭をつとめていた私に「政治に向つて挑戦し勉強するために政治問題特別委員会をつくらう」との会頭発言を受けて、JC（青年会議所）はそれこそ蜂の巣を突いたような論戦に明けくれた。不幸にもフランスで夭折した故遠山直道会頭（昭和四十年会頭）もウシオ電機会長牛尾治朗君（昭和四十四年会頭）も、この発言の渦中にあり、尚早論、当然とする論、タブー論のうずまくなかで、社会頭の確固たる信念は変わらなかつたのである。いわく、「地方の青年会議所運動を見ると、市政、県政への結びつきは当然のことであり、今に衆参両院、県政、市政にもJCメンバーの活動はその幅をひろげて行くべきである。ましてや、日本JCのベースで政治問題研究に背を向けることなど考えられるわけではないか」。

かくして第一回日本青年会議所政治問題研究会が軽井沢でその幕を開けたのであり、第一回の講師陣のなかのトップに、時の大平外務大臣が出席されたのである。駅頭にお出迎えし、食事も一緒に、講義後のゴルフも、そしてまた駅までお見送りをして、はじめて丸一日行を共にさせていただいた楽しい思い出の十数時間であつた。

昭和四十六年、私とウシオ電機会長牛尾君が相語らつて「大平先生を囲む会」が発足した。昭和四十三年の神野会頭以下すばらしい数名のメンバーが集まつたのである。私は大平先生に向つてこれだけをお願いした。「われわれはまだまだ非力で、いろいろと先生からお教えたたくことばかりですが、何とか会合の日だけは青年たちのために一々、他の予定をとらずゆつくりとお話を願いたい、これだけをお願いです」と。その夜の会合は楽しく進み、宴なかばこの会の名付け親にとお願いしたところ、筆を濡らせ達筆で「青藍会」と色紙帳に記されたことであつた。（その時の会場が築地の藍亭であつたので、青年の青と藍とを結びつけられたことと思う。）

青藍会では終始なごんだお顔でメンバー一人一人とよく話された。政治への不満にもよく耳を傾けられたのであるが、友人たちのとつてもない冗談には目を細め破顔一笑されもした。総理の笑いは屈託のない豪放さで、いわゆる「ハハハハハ」と聞える本当の笑いを持つておられた。また、直言や不満の声を聞かれる時のお顔は口への字に結び相手の目をじつと見据えて、「この人が真にいいことは何なのか」と肚の中を読みとろうとなさつておられた。そのお姿は古武士にも似て、限らない「心強さ」を感じたものである。

ゴルフも数回こゝ緒させていたのだが、真夏などタオルを右つしらの腰にはさみこみ、大きなスイングでドライブをよく飛ばされた。かなりなスライス打ちなので「やはり先生は右寄りの大物ですね」とやつたら、顔をクシヤクシヤにして二、三分笑ひこころげておられたものであつた。また、青藍会の折でのこと、特別立法となつた臨時所得税法が制定され、時限ではあつたが、メンバーからかなり強硬に不満の気持ちを率直に訴えかけられたところ、一、二分黙つて目をとじて沈黙のあと、真面目とも茶目つ氣ともつかぬお顔で「この諸君はもうけているんだからいいじゃないの」には、「してやられたなあ」と苦笑したものであつた。優しく青年にいたり深く、よく諭しよく笑つて下さつた総理のこゝ冥福を祈るばかりである。

（ゲレラン製薬社長）